

特集③

地域は

子育て応援隊



生石公民館 館長

角田 敏郎
(松山市)



◆生石地区・生石公民館について

公民館



生石地区は、松山市西部に位置しています。元々は半農半漁の村でしたが、昭和20年代後半から海岸を埋め立て、松山空港滑走路の延長、石油・化学・繊維などの大手工場の進出による急激な人口流入があり、地域の様は一変しました。現在、人口は約19千人（7880世帯）で、その構成は、15歳未満15.0%、65歳以上22.1%となっています。

松山市生石公民館は昭和25年に開設され、社会教育とコミュニティの拠点として地域に根差した活動を続けています。公民館の

基本理念は、「生涯学習理念に基づく物語のあるまちづくり」とし、「みんなでつくる、みんなの生石」をスローガンに自ら進んでまちづくりに参画する意欲を高める活動を創るよう日々改善しています。

公民館は、高齢者教育部、婦人教育部、成人教育部、青少年教育部、スポーツ・レクリエーション部、図書推進部の6つの部会とそれを代表する事業推進部により構成されており、事業を計画し実施しています。部会では、「よりよい事業を実施し、コミュニティの振興を図る。」ことを目標に、毎年同じように同じ事業をすることはありません。

特に、子育て支援に力を入れ、子どもにかかわる大人も元気になつていくことを目指しています。学校・家庭・地域を結び、子どもたちの豊かな育ちの実現を目指す一方、家庭や子どもたちへの支援を通じて地域に住む大人の育ちやコミュニティの活性化を図り、地域の子育て支援の環を広げるため、関係機関との連携を深めています。

◆まちづくり活動に果たす公民館の役割とねらい

生石地区では、本年3月「生石地区まちづくり協議会」設立に向けて準備会が設立さ



放課後子どもいきいき教室

れました。公民館の役割は、講座を中心にしたまちづくりや生きがいづくりの意識啓発を行い、知識・スキルを身につけていただく、それぞれの地域・場面でその成果を活かしてコミュニティの振興を図っていただくことを考えています。準備会設立以来、生石公民館では、ほぼひと月に1回の割合で学習会を企画・実施してきました。

公民館はまちづくり活動のなかで身近な生涯学習の拠点として、その機能を果たすことができます。準備会にも、啓発や施設利用などのメリットが生まれます。所謂M・C・Oの関係だと考えています。

生涯学習の成果は、充実したコミュニティ

3世代交流もち米づくり



生涯学習・生涯教育を充実させる働きがあると考えています。

◆公民館の活動

生石公民館は、子育て支援事業を核にまちづくりに通じる事業を創っています。

公民館で実施している家庭教育学級や地域子育て支援センターとの協働事業のほか、学社融合事業と位置付け、小学校の総合的な学習の時間や全校955名の児童全員が苗を植え、稲刈り、餅つきを体験する3世代交流もち米づくり、見守り活動、放課後子ども教室事業など、年間4千人を超える地域ボランティアが、子どもたちや学校にかかわるようになりました。さらに、一昨年から中学校との連携も始まったところです。

があつてこそ生かせる。しかし、地域コミュニティの希薄化は、加速していくばかりです。

まちづくり活動は、こうした変化に歯止めをかけ、

学社融合事業にかかわる地域の方々は、子どもたちの笑顔や感謝の言葉に感動し、生きがいを感じ、生かされていることに感謝しています。また、子どもたちの成長に役立させていただいていることにも感謝しています。今ではこの方々が、まちづくり活動にも積極的に参加されており、感動と感謝のまちづくりには欠かせない存在になっています。

放課後子ども教室アンケート調査の結果からこうした活動が、子どもたちのコミュニケーション能力や自己肯定感の向上に繋がっていることがわかります。さらに保護者は、地域活動への関心が高くなっていることがわかりました。「感動と感謝」が伝わることで、学校・地域・家庭の信頼が深まり、絆は強くなっています。

保護者世代は、まちづくり活動の大きな力となり、子どもたちは次の世代の担い手として期待しています。

◆今後の展望

まちづくり活動の鍵は、コミュニティの振興と教育にあると考えています。両者は、車の両輪の関係で、公民館の担ってきた役割そのもののなのですが、これまであまり交流のなかった団体・組織と深く接することで公民館活動にも新たな広がりが出始めています。

まちづくり協議会には、地域を代表する包括的な組織で、それぞれの団体・組織の活動が効率的にその能力を発揮し、活動しやすい環境を創ることが求められます。ま

ちづくりを通してWinとWinの関係を創っていただけることを願っています。
これからも公民館の「学ぶ・集う・結ぶ」機能を発揮してまちづくりの一翼を担う役割を果たしていかなければならないと考えています。



親子ふれあいDay